

宇大教育実践フォーラム，成果発表会を開催しました！

教職大学院では、自分たちの活動や学びを省察し、実践へと結びつけていくことを重視しており、毎週金曜日に行われている「リフレクション」が授業科目の中でも根幹を成すものとして位置づけられています。積み重ねてきた省察をもとに教職大学院での学びを振り返り、理論と実践とを結びつけながら学外へ発信する機会として、2月に宇大教育実践フォーラムが開催されました。また3月には2年生による成果発表会を実施し2年間の学びのまとめを行いました。

【宇大教育実践フォーラム】

平成28年度宇大教育実践フォーラムは平成29年2月11日（土）に開催されました。昨年度、教職大学院の開設を機に、「大学との連携による学校活性化フォーラム」から「宇大教育実践フォーラム」と名称を変更し、これまでの宇都宮大学と栃木県の学校現場とのつながりを継承しながら教職大学院での学びを発信する場となっています。当日は県内の小中学校や県立学校の教員、教育委員会関係者に加え、他大学の教員や教職大学院生、学部生等、多方面から参加していただきました。

午前は院生が学校現場で長期実習を行う「教育実践プロジェクト・長期インターンシップ」の取組について、3会場に分かれて発表しました。それぞれの実習で見てきた成果と課題、今後の学校現場への生かし方について、院生がそれぞれプレゼンテーションを行いました。発表後には、連携協力実習校、他大学教職大学院の方々からコメントをいただき、今後の実習への多くの示唆も得ることができました。



また、午後の「教育実践について語りあうラウンドテーブル」では、参加者が6人程度の小グループに分かれ、報告者の実践についてじっくりと語り合いました。宇大の教職大学院生の学びの報告だけでなく、現職の教員による実践、他の教職大学院での取組などさまざまな報告が行われ、グループでも異なる立場のメンバーが自由に語り合うことで議論の深まりが見られました。例えば、長期インターンシップの中で行った研究授業で子どもの言葉を待たずしゃべってしまったことを振り返り、教師の『間』の難しさについて語った学卒院生に対しては、同じグループの小中学校の教員から「自分も最初はそう

だった。経験の中で『間』のとり方を身につけてきたが、今でも沈黙は怖くて待つことには勇気がいる。」「でも黙っているとき子どもたちは考えているんですよ。」といった声があがりました。報告を聞く側も報告者に寄り添い自分自身の実践を振り返りながら語ってくださることで、実り多い場となりました。

フォーラムにご参加いただいた皆様に心より御礼申し上げます。また、次年度も多くのご参加をお待ちしております。

【成果発表会】

3月3日（金）には、今年度修了を迎える2年生にこの2年間の教職大学院での学びを振り返り、1年生へのアドバイスも含めて語ってもらう機会、リフレクションの集大成としての成果発表会を開催しました。

2年間を振り返る中で、入学当初に感じていた問題意識にどのように取り組んできたのか、実習で感じた悩みや戸惑いとどのように向き合ってきたのかなど、結果だけでなく、特に2年間の学びのプロセスに焦点をあてた語りとなりました。実習のなかで出会った先生方や子どもたちとのつながりに思いを馳せ感極まる場面も見られ、また、最も大きな学びは自分自身の物事のとらえ方が変化し拓がったことだという言葉が数多く聞かれました。1年生にとっても、自分たちの1年間を振り返り次年度について考える貴重な機会となりました。



この成果発表会が、3月に修了を迎える2年生にとって、教職大学院での学びを今後生かしていくための1つのステップとなればと思っています。

（文責：司城紀代美）

1990年代に理科や体育などで、「パフォーマンス・テスト（実技テスト）」という用語が普及しました。理科における観察・実験の操作，体育における運動技能の実演をもとに，その習得状況を振る舞い（パフォーマンス）をもって評価する場合に用いられました。パフォーマンス・テストという用語は，評価に対する考え方に一定の変化をもたらしました。この用語は現在でも使われています。

さて，近年注目が高まっている用語に「パフォーマンス評価」があります。先に挙げたパフォーマンス・テストが評価手法のひとつであるのに対し，パフォーマンス評価は，評価に関するとらえ方やそれに沿った評価手法の包含関係を表します。西岡他（2017）によれば，パフォーマンス評価とは「知識やスキルを状況に応じて使いこなすことを求めるような評価方法の総称」と定義されます。また，パフォーマンス評価に適する具体的な評価手法には，論説文，レポート，展示物といった完成品（プロダクト），スピーチやプレゼンテーション，協同での問題解決，実験の実施といった実演などが含まれます。端的に，パフォーマンス評価は「学習の成果と学習の過程の両方を関連づけて評価するもの」ということができます。

なぜ，このような用語が登場するのでしょうか。それは学習観の変化が影響しているからです。従来の行動主義的学習観では，知識の獲得状況は学習の過程とは独立に測定されうると考えられていました。それに対して，1990年代半ば以降主流となっている認知主義的学習観では，学習の過程を，既有知識と新しい知識どうしの関連づけの機会ととらえ，知識の獲得状況も学習の過程に即しつつ測定されるという考え方になっています。

学習観の変化によって，評価のとらえ方が変わります。このようなときに注意すべきことは，従前のとらえ方や評価手法に代わって用いるのか，従前のものと併存しながら用いるのかを見極めることです。例えば，知識の獲得状況の評価するには，ペーパーテスト（正誤，選択肢，短答型など）は，いつの時代でも（学習観の変化にあまり影響を受けず）有効です。パフォーマンス評価は，従前の評価手法と併存して使うことが重要です。片仮名で表記された用語で，流行しているから使ってみようなどと安易に考えず，目的に照らして使い分けていくことが大切です。

〈文献〉 西岡加名恵，他（2017）：パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる，学事出版。

《シリーズ：教職大学院授業紹介⑱ 「算数・数学授業デザイン論」（選択科目[前期]）》

「算数数学授業デザイン論」は，質の高い授業実践を目指して，算数数学授業のデザインにおいて求められる側面を多角的に考察する授業です。授業は，講義形式の部分と，授業DVDや資料を見ながらの演習中心の部分から構成されています。

今年度の授業は，7か国の数学の授業DVDを視聴することからスタートしました。視点を海外にまで広げることで，日本の授業の特徴が見えてきます。DVDを見て感じたことを自由に述べ合った後，研究者による日本の数学授業の特徴の分析を読み合い，更に議論をしていきました。現場で日頃行っていることが，海外ではみられなかったりするため，自分にとって当たり前の事柄を振り返る機会になったと思われます。

授業の前半は，国際比較の視点から，授業のデザインにおけるポイントとして，教材の側面と授業展開の側面について考察を進めました。どちらについても，文献を読み合ったり，授業DVDを視聴したりすることで，具体的に検



討していきました。特に，オープンエンドアプローチやオープンアプローチは，日本の算数数学の授業へのアプローチとして世界的にも有名です。オープンな問いを出して子どもの多様な考えを拾い上げる授業をしている受講者も多いですが，その理論的なベースを知ることは意味があると思いました。

授業の後半は，算数数学の授業をデザインする上で困難な部分の1つである「協働的な練り上げ」に焦点を当てました。子どもの多様な意見を集約していく練り上げでは，教師のコーディネートが十分でないと議論が深まりません。教師に求められる対応力を，研究論文や授業DVDを通して探っていきました。また，授業の最後には，子どもの視点から授業を分析することについても検討しました。授業全体を通して，受講者は，算数数学の授業を捉える視点が多様にあること，また，自分が経験上良かれと思って行っていることにも理論的なベースがあることを実感したようでした。（担当：日野圭子）



《編集・発行》 宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻（教職大学院）

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook：<https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し，教員が管理しているFacebookです。